

(研究ノート)

ICT 教育について学生は何をどのように学んだのか

—— ゲストティーチャーの講義を受けて ——

法政大学キャリアデザイン学部兼任講師 遠藤 裕子

【1】課題設定

2020年3月、コロナ感染増加による緊急事態宣言によって小・中・高校が一斉休校となり、大学の授業も大きく影響を受けた。筆者は、春学期は教育心理学を、秋学期は教育相談を担当している。感染状況による授業実施方針により、2020年度は全ての授業がオンラインであったため、一度も学生と対面で会うことなく終了した。2021年度・春学期はオンラインでスタートしたが、終了間際の3回は対面で授業を行った。秋学期は、スタートの3回分はオンライン授業であったが、後半の11回分は対面授業となった。

一斉休校が大きく影響して、特に2020年度、小・中・高校でICT活用推進が一気に加速した。この1年で10年分進んだという声もある。筆者が見聞きした範疇での雑感であるが、その活用には学校間にも教員間にも大きな温度差があり、さまざまな課題がみられ、それは現在も続いている。

担当している教育心理学では「学習の方法」についての授業の中でICT教育を扱うが、この状況下、何をどのように学生に伝えていくのか、現場の実態に接しながら考えた末に、2020年度・2021年度は現場の先生(20年度は小・中・高校から3人/21年度は中・高校から2人)をゲストティーチャーとしてお招きしてお話をいただいた。講義をお願いした先生方はそれぞれの学校でICT推進の役目をもって業務にあたっておられるが、インターネットリテラシーやメディアリテラシー、さらにはデジタル・シティズンシップといった課題を大切に扱い、また批判的であったり消極的であったりする同僚や苦手意識をもつ同僚にも配慮されているということがあり、そのような点も学生に伝えていただきたいと考えた。ICT教育について、現場の生の声から「学生が何をどのように学んだのか」をまとめておきたい。

【2】方法

教育心理学の「学習の指導」の回のリアクションペーパー(以下、RP)の記述に基づいて考察を試みる。RPは34人分(受講者全員分)あり、資料として巻末

に掲載した。

【3】考察

1. 学生が受けてきたICT教育の実際

回答を特に求めていたわけではなかったが、11名(1-02、1-04、1-08、2-07、2-08、2-13、2-14、2-16、2-19、2-20、3-03)が、これまで自身が受けてきたICT教育について記述している。1-02のように一斉休校によってGoogle Classroomを使用したケースもあるが、多くは1-04にみられるように過渡期にあって、必ずしも積極的なICT教育を経験してきたわけではないと思われる。そのことは、2-01「今回のお話は進んだ事例」、2-05「自分の中学校、高等学校の時と変わっていた為、たいへん驚いた。」、2-07「イメージが覆された。」といった記述からもうかがえる。

2. メリット・デメリットの両面からの考察

1-01「アンケート集計の効率化、教員間での共有が容易」、1-02「ICT教育が教員の負担軽減につながる。できるものはICTにする。その浮いた時間で、より生徒と関わると感じた。」のように、講師の話から学びを得ながら、11名(1-04、2-02、2-03、2-04、2-05、2-09、2-10、2-12、2-13、3-03、3-04)の記述にみられるように、多くはメリット・デメリット両面から考察している。マイナス面として挙げられた、視力低下など健康面への影響、使いすぎによる弊害、ネット環境の格差などは、今後も丁寧にみていくべき課題といえよう。

3. まとめとして一何を大切にしていこうか

2022年度より、教職科目に「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法」が取り入れられることになり、今後、学生は「ICT教育を行うことが前提」の教育を受けることになるが、「ICT教育を行うこと」が目的とならないようにしていきたい。大切にすべきことではないかと思う記述を挙げておきたい。1-03「ICT

が台頭したことで、『わざわざ』対面でやる意味、もしくはデジタルでやる意味を明確に位置づけないと学習に無駄があるとはっきりしたのではないかと、1-07「『絶対』を強くないこと」、2-15「バランスをとった活用の必要性」、2-17「『自分の頭で考えること』を忘れない ICT 教育が必要」、2-19「抑制禁止からデジタル・シティズンシップ教育へ」、3-19「柔軟な活用が大切」

参考文献など

坂本 旬他著 2020 「デジタル・シティズンシップ コンピュータ 1 人 1 台時代の善き使い手をめざす学び」 大月書店

坂本 旬他編著 2022 「吟味思考（クリティカルシンキング）を育むメディアリテラシー」 時事通信社

前田 康裕（文と漫画）2022 「まんがで知るデジタルの学び ICT 教育のベースにあるもの」 さくら社

文部科学省「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法」（仮称）に係る 教職課程認定基準等の改正等について（案）

https://www.mext.go.jp/kaigisiryoy/content/20210721-mxt_kyoikujinzai01-000017026-6.pdf

資料

- ①学生の RP の記述（34 人分）を受講形態別に整理した。
- ②この時間の受講形態は、34 名中、対面が 8 名、オンライン（zoom でリアルタイム）が 20 名、オンデマンド（授業動画を配信）が 6 名であった。
- ③番号は受講形態ごとの通し番号となっている。
- ④筆者が誤字脱字を修正し、紙幅の関係で文体を常体に統一した。お礼の言葉など、授業内容に直接関係がないと思われる箇所は省略した。番号横の記述と下線は考察のために筆者が記入したものである。
- ⑤ゲストティーチャーは次の通り
辻 史朗先生（千葉県船橋市立飯山満中学校教諭）
藤井 和夫先生（私立大東学園高等学校教諭）

1. 対面で受講 8 名

1-01 アンケート集計の効率化 教員間での共有が容易

会社のスタイルは流れとともに変わってきたが、教育だけはあまり変わっていなかった。だけど、「コロナ」の発生にともない社会ともに教育のあり方まで大きく変わった。「コロナ」という悪い状況だけど、これをどうプラスに捉えることが出来ていい方向に向けること

ができるのかを今回の授業を聞いていてすごく感じる事が出来た。マイナスをプラスに持っていく一歩目の「行動」は腰が重いかもしれないけど、「行動」できるか出来ないかで人間は大きく成長することができるのだなと思った。実際に、ICT を活用することで教員の働き方改革が起きるのではないかと。教員の仕事がブラックと言われてきたのに何も変化がなかったのは従来の事をずっと行って来たからである。こうした、新たな ICT 活用に不満を感じる方もいるかもしれないけど、労働時間の削減につながる一歩になるかもしれないなと思うことがきた。それは、今回のように現役の生きた意見や話を聞く事が出来たからだと思う。今回、実際に ICT を活用している中で、いじめのアンケートを Google フォームで行うことで、先生側からもペーパーよりも見やすくなり、全教員で共有が出来るという部分がすごくいいなと思った。学校全体で責任を持つ。担任だけの責任任せにするのではなく、共有することでの全体で生徒を見守ってあげられる活用法はすごく良いなと思った。これからは、必ず ICT と関わる部分が増えてくると思うのでこうした例はすごく為になった。

1-02 丁寧にかつ慎重に推進

辻先生・・・一番共感できたことは、「ICT=文房具」ということである。自分が小学生のとき、ICT 教育と言ったら、パワーポイント、テレビを使うなどなど...何か電子機器を使うことで、ICT だ！という風潮であった。中学生になって、「調べ学習」することが ICT 教育という風潮に変わっていった。高校になって google クラウドを使用した。とにかく、自分が児童生徒の時は、「ICT=文房具」なんて考えは全くなかった。今となっては、筆記具同様の扱いになっているとのこと。私には、中学 2 年生の妹がいる。毎日のように iPad を用いて学習している。自分のときでは、考えられないことがたった数年でおきているのだなと感じている。ただ辻先生は、ICT 化を加速させていく中、生徒に対して丁寧にかつ慎重に行っている。ただ、行うだけではなく使用意図の説明をしたり、生徒に興味を示させる（ある意味動機付け）ことを行っていることに感銘を受けた。辻先生の ICT 教育の研究で一番感じたことは、「ICT 教育が教員の負担軽減につながる」ということである。テストの採点、授業プリントの印刷、課題の点検などの時間を大幅に削減でき、教員の学校での拘束時間が減る。結果、「教員はブラック」というレッテルが無くなると思う。できるものは、ICT にする。その浮いた時間で、より生徒と関わると感じた。

藤井先生・・・藤井先生とは、GS のときにたくさ

んお話した。(対面でよかったと思う)特に、google クラスルームのことについて話した。私は、中学の塾講師(集団)をしている。google クラスルームで課題出題、授業では補いきれなかったポイント解説などを行っている。先生からは、「せっかく使っているなら、利点をとことん使いな!」とアドバイスをいただいた。先生と会話して共感したのは「なかなか発言しない生徒が、質問に来てくれること」である。授業終わりに積極的に話かけてくれる生徒もいれば、本当に理解できたのかな?と心配になる生徒もいる。そのような子たちが、クラスルーム上の限定公開コメントで質問してくれると嬉しいし、嬉しいというよりも安心する。

まとめ・・・コロナの影響で、ICT教育が進化したというよりも、進化せざるを得ない状態になった。結果として、新たな教育スタイルが見つかると同時に、課題解決(教員の残業、ペーパーレス化へ)につながるということである。私が教壇に立つ頃には(なれたら...)より進化していると思う。そのICT教育の流れを追っていきたいと思う。

1-03 自分自身に思い込みに気づく 授業を対面でやる意味・デジタルでやる意味

今回のICT教育について、私自身強く感じ、またグループセッションでも共感を得たのが、「私たちがすでに古い!」ということである。学生というからには、若者、デジタルネイティブの端くれではあると思っていたが、今日の辻先生と藤井先生のお話を聞いて、私たち自身の認識がすでにいかに遅れているか思い知って愕然とした。情報は常に古くなるものではあるけれども、変化に柔軟であることが、「若さ」ではないかと私は思う。そうすると、辻先生や藤井先生の方が、私よりはるかに若々しくいらっしやる、ということである。

私自身に、パソコンよりも紙媒体の方が学習効果は高いという決めつけや、とにかく対面的なやり方をするのが丁寧な教育だ、という思い込みがあった。なぜ紙媒体の方がよいと私が考えていたのか、自分で思い返すと、授業の内容をノートにメモする際の紙とペンの感触や、走り書きの図をかくことで情報が良く記憶されているかと思っていたからであった。しかしそれは、パソコンのキーボードの打鍵でも、タッチペンで描いた図でもよいわけである。第一に、紙かパソコンのどちらかが絶対的な善というわけではなく、どちらが個人にとってフィットするか、よりよい結果をもたらされるかが大切なのである。辻先生の仰っていた「パソコンがうまくなることではなくて、パソコンをうまく“使う”ことが大切なのです」という言葉や、藤井先生の「パソコンを、“文房具”として使うこと」の言葉が

わかりやすかった。

また、私自身も大学のオンライン授業を受けてみて、大学生のように自分で自分の勉強メニューを管理できるようになっているならば、ただ知識を得るためだけなら対面で授業をやらなくてもよいし、むしろ一人の方が効率的であると強く感じた。一方で、この教育心理学のグループセッションはとても刺激的なので、できれば対面で、もしくはZOOMでも参加したいと思った。つまり、ICTが台頭したことで、「わざわざ対面でやる意味、もしくはデジタルをやる意味を明確に位置づけないと学習に無駄があるとはっきりしたのではないか。授業方式の選択について、漫然と旧態を固持しようとするのは、退行を招くと思った。(進化の反対は、逆行ではなくむしろ停滞のことである、と聞いたことがある。)

1-04 メリットと懸念

初めて対面だったが、とても良かったと実感している。集中力の持続が自宅と段違いに良い。辻先生と藤井先生のお話を聴かせて頂き、気になったことがある。ICTの活用が進み、授業体系の柔軟性が増すと不登校や学校に来にくい子たちにも同じ授業の提供ができると考えているが、実情はどうなのか伺ってみたいと思った。

私達は丁度、PCやスマホが学校教育に少しずつ導入された過渡期を体験してきた。小型PCを活用した授業は高校2年生時に初めて行われた。数年先のICT教育はどこまで進むのか気になった。

全体の情報共有であつたり教員への負担軽減などの多くのメリットがある一方懸念点も大きいと考えている。モニター画面を見続けることによる視力低下、学校に来ることへの喪失感などが挙げられる。教員の負担という点では、軽減を謳っているが実際は機器の指導が増え、以前とそれほど変わらないと思う。使い方など指導する授業数を増やすことを検討してみるべきだと思う。

1-05 教育評価との関連

今回の授業で、定期テストをGoogleフォームで実施したということについてのお話が特に印象に残った。昨今のテストでは、知識の確認だけに限らず、応用力を問うことが求められる傾向にあると感じる。そのような中、Googleフォームでのテストは知識の確認だけにとどまり時代に合っていないのではないかと考えた。しかし、実際はテストまでの過程、ICTを用いて評価することで、定期テストでは知識の確認だけでも十分になっていた。このことから、教科によって異なるがICTを効果的に用いることで、教育評価の幅が広がる

ことにつながると感じた。

教育心理学第9回の授業で扱われたポートフォリオ評価法は、まだ開発途中で、改善点が多くみられると考えていた。しかし、今回の授業でICTを用いた教育評価に多くの可能性を感じ、その可能性を広げ実現していくために、教員も成長していく必要があると強く感じた。

1-06 柔軟な対応 学校づくり・クラスづくりのための活用

私は、辻先生のお話の中にあつたクラスや部活のホームページ作成にとても興味を持った。特にそれを生徒が自ら作成することに良い効果があると感じた。生徒が自らクラスで共有する情報を入力するため、クラス全体のことをよく見るようになると思うからである。現在、日誌や献立が記録されているとお話されていたが、他にも持ち物や提出物を入力することでクラス全体の忘れ物の数を減らすことができると思った。また行事があつた時にはその写真を載せると、いつでも楽しい思い出をみんなで振り返ることができるので、クラスの仲が更に深まると思った。部活の方もホームページがあることで、相手校は誰でどんな特徴があつたか、前回良かったことや悪かったことは何かを部員全員がすぐに確認できるので、良いと思った。そしてホームページではないが、辻先生の学校、藤井先生の学校のどちらも、パソコンでの授業や試験より紙の方が良いという生徒（保護者も含む）や先生に対応しているところが素敵だなと思った。ここまで情報化が進むと、それについていける人もいればそうでない人も思う。このように、1人1人のペースに合わせて徐々に制度を変えていくことやわかる人がわからない人に教える雰囲気づくりは良い学校づくり・クラスづくりに繋がると思うので、自分が教師になった時には見習いたいと思った。

1-07 「絶対」を強くないこと

今回、特別に実際の学校現場でICTに触れていらっしゃるお二人の先生にお話ししていただいた。辻先生に質問させていただいたが、紙を使用する線引きについての質問の返答で「一回一回の授業で何を1番児童生徒に時間をかけてほしいかで見極める」というお言葉が大変印象に残っている。基本に立ち返ってみると、教員の立場として何が大切なのかを考えることが重要なのだと思う。コロナ禍の影響で(おかげで)進んだICTの技術はこれからも刻一刻と移り行くはずである。そこで「絶対」を強くないことが今後の進展に大きくかかわると感じた。現に法政大学では、zoomと対面のハイフレックスを用いて学生に「絶対」を強要しな

い。あくまで主体を「児童生徒学生」にあて教育を進めていくことがあるべき「ICTを含んだ教育」の在り方だと授業を通して学んだ。私自身も自分のできる範囲でICTと向き合っていきたいと思う。

1-08 デジタル機器の活用の良さ なくしたくないもの(対面授業・個人への対応)

今日の授業は先生を招いての中高生でのICT教育の推進についての授業だった。かなり積極的にICT機器を用いて授業や業務を行なっている学校も存在しているということがわかつた。自分は若い世代でありながらもデジタル機器全般の使用については否定的に取ることが多く、積極的に使用してこなかつたので、教師の立場になつた場合に対応できるのか不安になつた。

今日の授業でICT教育について学んだものの、実際の教師と対面して対話をしたり、対面で学ぶことが自分の学びにつながりやすいということ、身をもって体感した。

私の考えとしては、教師の業務を減らしたり、効率化できるという点でデジタル機器の積極的な導入は良いことだと思うが、生徒の学習のためにも対面で授業を行い、個人に対応するという部分は無くさないで欲しいと思った。

2. オンライン(zoom)で受講 20名

2-01 すごく進んだ事例

今回お話していただいた事例はすごく進んでいるものだと思う。今後私が教育に関わる時に一つの目標になるものだと思う。テストをパソコンで行つたというのはすごく驚きだったが、教科によっては可能なことで、生徒が有効活用できるならば取り入れていくのが良いと思った。

私の母は小学校の関係者で、コロナが流行してから学校のICT教育についての話をよく聞く。母はこの4月に転勤になり、ICT教育の学校差がすごくあると言っている。前任校も現在勤務している学校も同じ市内にあり、市から端末を一人一個配られている。しかし前任校では校長がICT教育に積極的に取り組んでいて、保護者への連絡を、パソコンを通して行つたり、授業参観の代わりに授業動画を公開したりと様々なことに活用できているが、現在の学校ではほぼ端末は使っておらず差がすごく出ている。設備があつても学校の方針だったり、教員の積極性や能力で活用の差が出ているのが現状だと思うので今後改善すべきだと思う。そして私が教員になつたときにしっかり活用できるようになつておかなければと思う。

2-02 良い点と負の功罪

いじめのアンケートは紙の場合担任の先生しか見ることができないが、iPad にすることにより全職員が閲覧でき明瞭になる。このようにある問題に対し、あらかじめ目を通してから職員会議に臨めるので、時間の節約にもなる。

宿題等を紙ではなく iPad で配信すると、フィードバックできるので何度もやり直せることがいい。また失くしたり忘れることもない。さらにゴミが出ないので、二酸化炭素排出削減により SDGs に適っている。全国の小中中で紙を使用しないと、どれだけ温暖化対策に良いことだろうか。

本日は良い点を伝えて頂いたが、負の功罪もあるだろう。 スティーブ・ジョブスもビル・ゲイツも 14 歳になるまで我が子には与えなかった。先日、小2のクラスで席替えをした。視力が下がり、前に座りたいという児童が多かった。小2では眼鏡はまだかけたくないだろうし、コンタクトもできないので前に座るしかない。今後子どもの眼と脳が心配である。

2-03 デジタル機器の使いすぎを懸念

今回は、実際に中学校・高校で働かれている先生の ICT 教育についてお話を聞かせていただいた。まず、毎日沢山の仕事がある、実際の教諭の方にお話をいただくのは貴重な経験だと思った。また、全ての中学生が iPad を持っていて、それを使ってプレゼンテーションをすることもあるというお話を聞いて、このコロナのおかげで生徒のデジタルリテラシーが上がったのではないかと思った。しかし、授業中にも iPad を使えるということは、生徒が勉強以外の目的に機材を使ってしまう恐れがあると感じた。 実際に、中学生のスマホ使用時間は年々増加しているという記事を見たことがあるので、そこをどう対処していくべきなのかと疑問に思った。 私の妹は中学三年生なので、iPad を学校から持って帰ってきて使っているところを見るが、漫画を読んでいたりと、YouTube を見ていたりするので、よく注意しているが、直らない。これが、氷山の一角で、学校でも起こっていなければいいと感じる。

2-04 メリットや負の側面など多角的に考えることが必要

現場における貴重なお話を聞いてとても参考になった。話を聞いているとこれまでの形態を改革しようとするのはとても大変なことだと思った。私には弟がいるが、コロナもあったからかネットとかアプリ内で授業のレジュメや課題を出すようである。弟は私が通っていた高校に通っていて、私が在籍していた頃にはそのような取り組みはなかったのが昨年または今

年から始まったと思う。先生がおっしゃっていたようにコロナが結果として日本教育を進めていくのかなと思った。また、現在の中学3年生の世代から共通テストで情報の科目が必修化されたり、ますます情報を取り扱える人材が増えているので遠藤先生みたいにうまく活用していきたいと思った。話を聞いていて ICT 教育のメリットしか頭になかったが、グループワークの際に負の側面の話をお他のメンバーの方たちが話して、もっと色々なところに目を向けて多角的に考えないといけないと考えさせられた。

2-05 格差に配慮する必要性

この1年間で ICT の活用が増えたことはなんとなく理解していたが、実際に現場に立たれている先生方のお話を聞いて、あまりに自分の中学校・高等学校の時と変わっていた為、大変驚いた。学校教育で ICT が取り込まれたのは良いことだと感じたが、生徒の ICT 適応力の個人差が、今は考慮されていても後々格差となっていくないように気を付けていかなければならないと感じた。 又、私は高等学校の情報学の授業で情報リテラシー教育を学び、著作権の問題や情報の真偽等を具体的に学んだが、ICT に触れる事がより早く多くなることで、より早い段階で授業に取り込まなければならないのではないかと感じた。

2-06 考えていたよりも生徒の苦手意識が見られないことを認識

本日は、辻先生と藤井先生に中高での ICT 活用についてご講演頂いた。これまでニュースや新聞などのメディアにおいて、小学校も含めた学校教育において ICT 活用が進んでいるという話を目にしたことはあったが、実際の実用例と学校で働く教職員の声を聴く機会は初めてだったので、非常に貴重な経験であるとともに学びが多くあった。一番大きな学びであったのは、自分が考えていたよりも ICT に対する生徒の苦手意識があまり顕著に見られないどころか、むしろ有効活用しているという点である。 私が高校生だった頃は、学校にもよると思うが、私の通っていた学校ではまだ ICT が導入され始めたばかりで、今の学生ほど ICT を活用した教育ではなかったが、それでも小中校では紙を用いた授業が中心であった私にとっては、かなりの抵抗感があった。そのため、小学校から ICT を導入されることに対して私は生徒自身が嫌悪感を抱いているのではないかと考えていた。しかし、本日のご講演の中では、Google form を用いての試験などに抵抗感を抱いているのは少数の保護者のみで、ほとんどの親は寛容的で、生徒からの評判も良かったということが述べられていた。これは私にとっては衝撃的であったと

ともに、教員になる上ではそういった ICT 活用を前提にした上での授業を構築していく必要性を強く感じた。また藤井先生には「ICT 活用が苦手な先生へのサポート体制」について質問もさせて頂いた。ご丁寧に回答を頂き、更に学びが深化するとともに、自分はあまりパソコンなどが得意ではないので、研修会などが行われているとお答え頂いて、少し安心できた。講演を聴いた後の GS のディスカッションにおいても、学生は皆、ICT を活用していく必要性を肌で感じており、講演を聴けたことへの喜びを語り合った。私もファシリテーターであったが、話が弾んで時間を意識することを忘れるほどであった。

2-07 現状を知り、イメージが覆る

辻先生と藤井先生のお話をお聞きし、ICT 教育の様々なイメージが覆され、現在どのような教育が行われているのかということを知ることができた。

まず、辻先生がお話しされていた中で、ICT 機器≠教具、ICT 機器=文房具ということにとっても興味を持った。私が学生であった時には、どちらかという、ICT 機器は学校では物珍しい機器で特別な授業の時にしか出ないものという認識であり、ICT 機器=教具といったほうの考え方だったと思う。一方で今の学校現場では、ICT 機器=文房具というように一人ひとりが当たり前に使えるようになる時代が来たのかなと感じた。実際、法政大学でも、hoppii を活用するように、学生が使えなければ、授業が成立しないような時代であり、一人ひとりが ICT 機器に対する認識を変える必要があると感じた。先生がお話しされていた中で学習者中心の運用ポイントの中に、デジタルシティズンシップ教育というのがあった。抑制や禁止（情報モラル）を重要視した時代よりも今では当たり前に使えなければいけないいわば常識の一つになったと感じた。また、藤井先生が音楽の授業で ICT 機器を活用された例として曲を聞いて心に残ったものを書くというものがあった。各生徒のものを見ると、紙で書く以上にとってもカラフルで、文章とイラストや背景をつけるなど、ICT ならではの書き方で、生徒の表現の幅も広がり、とても良い例だと感じた。

一方で、ICT に関しては、従来の紙と筆記用具を使ったものと違い、教員の側にも、ICT が使いこなせない人もあるということから、私自身も、これから ICT に関する情報や使い方を学び、使いこなせるようにしたいと思う。

2-08 うまく使い分けることと変化に対応する必要性

今回は ICT 機器を賢く活用していくためにというテーマで、高校の先生にもお話をさせていただいたが、

私は私立と公立で ICT 機器の活用の質に大きな差があると感じた。私の公立の学校では一人ひとりに iPad が支給されていたが、気になったことや分からないことを調べる程度で学級日誌や課題を、ICT 機器を利用しながらやったことがなかった。そのため、ICT 機器をうまく使いこなせる人と使いこなせない人との差がとても激しかったように思う。先生もおっしゃっていたように ICT 機器を利用したほうが効率のいいものと、ノートやプリントに直接書いたほうが良いものとでうまく使い分けながらやっていく必要があると感じると同時に、子どもの基礎 ICT スキルの育成に力を入れたり毎日の学校生活のデジタル化に変化したりなど今までと同じ形の教育体制でやってはいけない部分も出てきていると感じた。

2-09 マイナスポイントにも目を向ける必要性

コロナ禍の1年で ICT が 10 年分進んだというのは改めて考えてみるとすごい時代を生きているのだなと思った。このきっかけがなければ 10 年後の人間たちが使用していたであろう形態を、未来を先取りして私たちが使用しているというのは得をしたような気がする。しかしその一方、新しいことには実行したからこそわかるマイナスポイントが付き物だと思う。そのためにも私たち学生や児童生徒の ICT 教育を受ける対象はメディアの情報だけでなく、その推奨されているカリキュラム、システムにもクリティカルな思考を以て向き合う必要があると思った。しかし、やはり Google フォームの機能を取り上げても、集計等の時間短縮ができたり、iPad を通じて出会う様々な媒体が生徒の意欲向上に頼んだり（絡んだり）ということ考えると便利なものなので、これから教育の場で ICT と教員と子ども達がうまく共存していけたら最強だと思った。

実際に何名かの子ども達の課題を見せてもらえたことが ICT 教育に対する疑念を少し晴らしてくれた。これまではデジタルでは子供たちの心を感じる事がアナログより困難になるのではないかという風に考えていたが、ネット上にある素材と子ども達自身の言葉を感性豊かに組み合わせた作品を見たときに確かに感動したため、デジタルでも感じる温度があるのだということを知ることができた。一方で、デジタル機器が苦手な子ども達は表現したいことを上手く表現できないジレンマを感じてしまうのかもしれないと思うと、複雑な気持ちになったが、それは絵が得意・絵が苦手にも同じことが言えるため、考えれば考えるほど、新しい試みというのは試すことでしかわからないのだなと思った。

しかし、Apple 創始者のスティーブ ジョブズをはじ

め、Apple の幹部たちは子供にスマホ、iPad を与えていないという話がある。彼が言うには「iPad はそばに置くことすらしない」らしい。そのようなものをまだ自律が難しい小学生のころから与えていて大丈夫なのか不安になる。スマホ脳という本が世界的ベストセラーになっているほど、人々は ICT に頼りながらも、どこか訝しく思っているのだと思う。そんな不確かなものを、幼い子供に大々的に与えてしまって大丈夫なのか、今は不安が大きい。

2-10 メリットとデメリット 格差是正の必要性

私は現在、教職入門も受講しており、期末レポートのテーマを「オンライン教育の課題」に設定した。このコロナ禍で急速に普及したオンライン教育には様々なメリットが存在するが、デメリットも数多く存在する。課題の一つとして「通信・端末格差」を挙げようと考えていた。オンライン教育を今後も続けていくのであれば、各家庭のインターネット環境やタブレット端末等の所有状況による格差を是正する必要がある。だが、今回の話を聞いて、対面教育においても同様のことが言えるのではないかと考えるようになった。オンライン教育でも対面教育でも、今後は ICT 機器を用いて進めていくことが求められる。自宅だけでなく教室でもパソコンやタブレットを使用することで、より良い学習を実現できる可能性が高い。

だが、それでも私は教育現場への ICT 機器の導入には抵抗がある。学校教育においては、単なる教科学習だけでなく、教員や他の児童生徒とのコミュニケーションも重要である。また、手書きでの記入も人生において不可欠な要素である。ICT の導入がそのような機会を奪ってしまうのではないかと不安がある。今回お話いただいた先生方はこのような課題への対策もしっかりされていると仰っていた。自分が教壇に立った際にも、時間効率や自分にとっての利便性だけを追求するのではなく、学習者のことを考えながら、ICT 教育を取り入れていきたい。

2-11 賢く使っていくために必要なこと

最近になってスマホが発達してきたことで、若者が使用する頻度が増えている理由の一つに、時代についていく必要性などもあると感じた。それによって自分も含めて睡眠の時間が減ってしまうことや、依存症に近づいてしまう人が増えてしまっている。賢く使っていくためにも、自分で時間を制限することや、自分が最近取り入れているアプリを用いたスクリーンタイムの制限なども場合によって必要であると感じた。また、高校から Google フォームを用いたアンケートなども増えてきており、これによって生徒が悩みを打ち明け

やすい環境を作ることができ、利点もたくさんあると感じた。現在では GIGA スクールなども取り入れられつつあり、こういった利点をさらに生かしていくためには、自己調整能力をもっと身につけていくべきだと感じた。そのため、教師や保護者の管理ではなく、自分自身で自律をしていくことが大切であり、していかななくてはならない時代へと変わってきていると感じた。

2-12 メリットとデメリットを考える必要性

ICT 教育と聞いて、最初に思ったのはデジタル教科書についてだった。小中で沢山の重い教科書を運ぶ必要性がなくなれば、それ程快適なことはない。一方で、デジタル画面を毎日長時間見続けることは果たして可能なのだろうか。小説などの長文を電子媒体で見るとは個人的に好きではない。目の疲れなど身体への悪影響が懸念される。デジタルと紙媒体、教科書はどちらがいいのだろうか。

オンライン授業が展開される中で、授業学習の再利用が容易になっている。一度作成した授業動画を違う人に繰り返し見せるという方法だ。塾などではだいぶ前から行われていたし、大学でも一般公開されている動画を拾ってきて、そのリンクを貼るだけの先生もいる。授業の質を均一化出来るという点で大きな利点がある一方、教師の役割が教える側から評価するだけの側へと変わるのでないかという思いもある。それが良い事か悪い事かも分らない。だが、学校という制度の役割や人が直接関わる必要性のようなモノがどこにあるのかを考えることが必須だと思った。

なんだか今回の授業内容と離れたことばかりに思考がいったしまった。

2-13 メリットとデメリットを考える必要性

私はもろアナログで育った世代だったので、昨年 ICT 教育が進んできたことをうわさに聞き、少しマイナスなイメージを持っていた。紙に書く方が脳への定着力が高いというような話を聞いたことがあったので、大変そうだな、それで学力の向上が図れるのかと心配していた面もあった。しかし今回お話を聞いて ICT 教育への見方が変わった。アンケートの結果をすべての先生がすぐに見ることができ、学習の場面においては、物が残ること、何度も繰り返し解き直しができること、ゲーム感覚で生徒が課題により組みやすいといった点で学力の向上が図れることなど ICT ならではの利点が多く感心した。しかし、先生方が言っていたように紙媒体での教育がなくなることはあり得ない。例えば、私は国語の教員を目指しているが、長い文章をタブレットで見ようとすると目の疲労が大きかったり、頭付近の文章と後方付近の文章を比べる際に紙で全体を見

られる方が比較しやすかったりする。したがって、その学習内容に合わせて紙媒体と ICT とを組み合わせるというのが今後の教育なのだろうなと思った。私たちが先生になるころには今よりもますます ICT が進化しているだろうから、その点で将来先生が生徒に迷惑をかけないように、ICT 教育に関する先生養成講座もメジャーになっていくべきだと思ったし、今後そのような授業も増えていくように思った。

2-14 コロナ禍での先生方の奮闘

今回は学校教育の現場で、リアルタイムで働かされている先生方のお話を聞けたことがとても有難い機会でも、非常に勉強になった。今、コロナ禍の中で急速にオンライン制度を整えることが必要とされている。去年わたしが高校3年生のとき、他の高校に比べて6学年の中高一貫だからか、zoom 授業やオンライン教材が行き届くのが遅くなり、受験に対して非常に焦りを感じていた。副教科など、このままでは範囲が終わらないのではないかと危惧し、焦燥感に苛まれていた。塾なども受け入れ態勢が出来ておらず、キャパオーバーだと言われることが多々あったそうだ。自学で5教科7科目の勉強は出来ないと思い、上手くいかない日々を憤りを感じていた。そんな中、休校になってから2ヶ月程度で日本史の先生が自宅からプライベートな形で学校を介せずに授業を配信してくれた。学習の目処がたち、勉強がうまく軌道にのれるようになった。今回、コロナ禍の教育現場の話を生で聞くことができ、自分の想像力の無さに愕然とした。先生たちがなにもしてくれていないと思ったあの日あの時にも必死になって未曾有の時代を乗り越えられる方法を探してくれていたのだ。自分の浅はかさを恥じると共に、支えてくださった先生方に感謝を述べたい。

2-15 バランスをとった活用の必要性

昨年（高校3年）の新型コロナウイルスによる休校期間中、高校で Google Classroom を活用していた。しかし、使う機会は多くなく、まだまだ ICT 教育は進んでいないと思っていたが、今日のお二人の話を聞いてあまりの進み具合に非常に驚いた。辻先生のお話では、学習者中心に運用することということがすごく大事だと思った。特に、リスクを知った上で情報の自律活用を重視するというのは、学校現場、特に公立学校ではかなり勇氣ある決断なのではないかと思った。また、定期テストを Google フォームで実施して、紙媒体と選択できることは現在の ICT 教育ではかなり理想的な方法ではないかと思った。藤井先生のお話でも、生徒の個人の答え等が守られる中で学習できる環境にあることが様々なニーズの対応に貢献すると感じた。

また、教員に対しても絶対的なことは示さず行うということは大切だと思った。自分も紙媒体の方が学習しやすいと感じることもあるので（GS でもそのような意見があった）、今までであった手法や工夫をなくさないようにバランスをとった活用が必要だと全体を通して感じた。

2-16 世代による差が生じていることが今後の課題

私の学校はコロナ前から ICT の導入が進んでいて、数年前に学校情報化優良校に認定された。導入されたのは私たちが高校二年の時だったが、一人一台パソコンを持っていたのは一つ下の代の高校一年生からであった。私が聞いたところによると、高校二年生は勉強や部活で忙しくパソコンをこのタイミングで使い始めるのは余裕がないのではないか、と思われた、との理由で私たちの学年は自分のパソコンを持ってなかった。

しかし、一つ下の学年は自分たちでグーグルクラスルームを使ってアンケートフォームを作ったり、クラスルームに何かを投稿したりする事ができるのに、リーダーであるはずの高校二年生がなにもできない、部活や委員会でもパソコンを使う機会が多い高校二年生が自分のパソコンを持っていないという事態になりなかなか不便であった。なので、私は ICT 教育が進んでいる学校と言われながら、実際にはほとんど使わない、使う機会がないという状況下にいた。パソコンをフル活用した授業はなく従来通りプリント中心の授業で、情報の授業とプレゼンテーションの時くらいしかパソコンを触っていなかった。一方後輩は皆パソコンを持っており、委員会などで話し合いをしながら議事録や資料を作ってしまうので、この技術の差が何とも言えずもどかしく見ていた。これからは一人一台パソコンがある状況が当たり前になるのだと思うが、それを経験していない私たち以上の世代と ICT をフル活用している世代との技術の差を埋めていかなければならない、という課題が生じているのではないかなと思った。

2-17 「自分の頭で考えること」を忘れない ICT 教育が重要

私は授業を聞くまで、「勉強は何が何でも紙媒体！！絶対に紙！！」と強く思っていたが、それは自分が英語の教師になろうとしているからであることに気がついた。

辻先生は理科の担当をされていて、確かに理科であれば読む文章は英語のように長くなく、また単語を書く練習もないため、Google フォームの方が効率的であることに気がついた。思い返してみると、中学校のときの理科のファイルプリントは、授業回数を重ねるに従って、プリントの枚数が増えるため、ファイルが分

厚くなり、とても重かったのを思い出した。Google フォームなら、自分の好きなときに自分の見たいページだけを、プリンターで印刷することができて、「プリントを探す手間」が省けることに気がついた。私は大学生になり Word で文章を入力することが多くなり、つつい交換機能に漢字の変換を頼ってしまっている。ふとした瞬間に、「この漢字って、これであっていたかな。」と覚えることがあります。なので、子どもの「書く」能力を育成するためにも、辻井先生がおっしゃっていたように、「科目によって使い分ける」ことが大切だと心から思った。

また、コロナ禍の宿題に関して、私の高校は3回ほど先生がゆうパックで宿題やお知らせプリントを送って下さったが、先生たちにとってそれは大きな負担であったことを今日、初めて知った。そのような負担を解決してくれるのが ICT だったのだなと感じた。

私の履修している「文化情報学概論」で、森村先生が「最近、頭で考えるよりも、手が先に動いていることがあるでしょ（スマホで調べるために）。」とおっしゃっていた。機械が発展するにつれ、私たちはそれを頼って生きている。人間の外部の記憶装置ともなりつつあるスマートフォンやタブレットばかりに依存し、「スマホがないと何もできない」ということを避けるために、スマートフォンを利用しながら、「自分の頭で考えること」を忘れない ICT 教育が重要だと感じた。中学校や高校でこれほど機械を使って学習している、ということは、今後の就職の際に「機械を使える能力」が必然的に求められると思う。企業側が求めるレベルが高くなるということだと私は考える。そのような社会に対応するために、教育は、今後ますます重要なものになると感じた。

2-18 紙と ICT それぞれの良さを生かすこと

今回、現場の先生方の生の声を聞くことができて、とても貴重な体験であった。辻先生は中学校の現場について、藤井先生は高校の現場についてお話して下さったが、ついこの間までいた中学校・高校がこんなにも進化していたことを知り驚いた。プリント用紙を2枚以下しか配布せず、すべてインターネット経由での配布をしている点は、私自身もプリントをなくして探すのが大変と苦勞していたので、掛けるべきところに時間をかけるという意見は ICT 教育が進化したからこそ実現することだなと実感した。しかし教育の形が長い間変化をしてこなかったため、私の中にも紙の授業の良さを知っているからこそ、ICT 教育へ転換する必要はあるのかと悩まされた。これまで学習のパートなどを振り返ると、先生と生徒のコミュニケーションをもとに授業が成り立っていると感じていた。それが

生徒対 ICT 機器になってしまっているような感じもした。ほかの先生の所にすぐに助けに行くことができるといってお話を聞いて、じゃあ授業中に生徒と先生の間でどのようなコミュニケーションがあるのか、以前よりも減ってしまっているのではないかと感じてしまった。

ただ、実際に生徒さん自身が楽しんで ICT 機器を使って課題に取り組んだものを見ると自分の考え方は古いのかなとも感じた。ICT 教育のメリットをもっともっとこれから自分が感じる事ができれば、紙と ICT の良さ両方を知ることができ、それらをうまく組み合わせ活用できるようになれるのがよいのかなと思った。

2-19 抑制禁止からデジタル・シティズンシップ教育へ

現場の先生から ICT 教育のお話を聞くことができ、とても面白く、数年前まで中高生だったが時代の変化を感じた。特に辻井先生がお話して下さった情報モラルに関する指導の変化に興味深く感じた。抑制禁止からデジタル・シティズンシップ教育への転換は、子どもたちが ICT に親しみ、スキルを上達させる上でとても重要な意味があると思った。私が受けた情報モラルの授業は、ICT の持つネガティブな部分を誇張して極端な例を取り上げたもので、SNS はもちろん、生徒がインターネットを使用すること自体に批判的なものだった。これが、私が最近まで ICT に不信感と苦勞意識を持って避けていたことに影響していると思うが、このような指導の変化は社会の変化によるものというよりも ICT についての知識がある先生が増えたことによるところが大きいと思う。十数年で大きく状況が変化する現代社会では子どもたちが活躍する新しい社会で必要な価値観やスキルと教師のもつ価値観やスキルが異なることがしばしばでてくるのではないかとと思うが、そのときに、教師が正しい答えを持っていて一方的に教えるという構図では、教師が新しいことに不安を感じたり否定的になってしまっているようなことが起きてしまうのではないかと感じた。

2-20 過渡期にある

今回はお二人の先生から ICT に関する話をさせていただいたが、その話を聞いて自分の高校時代のことを思い出した。自分の学校はコロナ以前から一人一人にタブレットやパソコンを与えており、情報機器の利用には慣れていたので、コロナでオンライン授業になってもそれほど苦勞する人は教師、生徒含めていなかったように感じる。また、クラスルームなどの新たなアプリの導入もコロナに合わせてどんどん進めていた。しかし、私たちが入学当初から利用していた某企業〇

〇〇〇のアプリは、サーバーやユーザーの情報漏洩などの問題があり、特に自分がよく覚えているのがそのアプリを使ったテストである。定期テストなどの大きなテストではなく、確認テスト程度のものであったが、漢字指定がされていないのに、答えが漢字であるからいくら正解であっても平仮名で入力したものは不正解となる、という事態が生じた。今回の話で、アプリは違うが定期テストを紙ではなく端末で行うという話があった。このような経験をした自分は将来教師になった時そうした問題に直面するのが少し怖いと感じた。しかし、アプリが正確なものとなったり、通信環境を整えば教育の場面において ICT が有効なものとなるのは間違い無いと考える。

3. オンデマンド 6人

3-01 柔軟な活用が大切

今回は二人の先生から ICT 教育についての話を聞き、大変勉強になった。なかでも、お二方は教育界における、IT 人材と呼ばれるような立場にしながら、その技術や能力におごっていない点がとても印象的だった。例えば、「ICT 教育はあくまで生徒が効率よく、また理解を深めるためのひとつの手段に過ぎない。」ということや「できない先生にも寄りそい、必要に応じて利用すればよい。」など、どうしても見失いがちな ICT 教育本来の“柔軟さ”がプレゼンテーションを見ただけでも感じられた。このような配慮は教師、保護者などの反感を買いづらく、誰もが苦しまない理想的なものだと感じた。

そして、私は藤井先生の「ITC 教育で救われる人間がいる」という言葉も印象に残っている。教育における永遠の課題ともいえる、誰一人取り残さない教育。ICT 教育がその一翼を担っていると考えると、大変興味深く感じた。また、藤井先生はご自身の生徒時代の経験からそのようなことをおっしゃっていたが、そのような経験を ICT 教育という一つの形にできることは大変尊いことだと感じた。

最後になるが、ご年配の先生が苦手だと言いながら、辻先生、藤井先生両名の力をかりて、オンライン授業に取り組んでいることは頭が下がる。生徒の学びのために自身の成長も止めない。このことは頭ではわかっていても早々できることではない。このような姿勢を学生である私たちは特に見習わねばならない。

3-02 ICT 活用は「選択肢を増やす」ための手段 押し付けられないことが大切

新型コロナウイルスの影響によって日本の ICT 化は大きく進んだ。これまでの学校における ICT 活用

は、教具としての側面が強く生徒の情報モラルを育成するような教育を行っていた。しかし、GIGA スクール構想下の現在においては ICT 機器を文教具として子供たちが主体的に使用している。辻先生の学校では実際にクラスのホームページ運用、クラブの活用報告などを生徒が主体的に行っている。授業においてもプリントをデジタル配信できる、課題を提出する際により細かく評価ができる、成績の基準が明確になるなどのメリットがある。また個別にフィードバックを行うことが容易というメリットもある。しかし知識を問う問題には有用であるものの国語など、書くことが重要視される分野においては使用が難しいなどの課題もある。

実際にお話を聞いてみて、ICT 活用というのは「選択肢を増やす」ための手段であって決してデジタル化を押し付けてはいけないことを学んだ。ICT 教育は子供たちの豊かな発想力を生かすことができる、相性のいい教育方法であるだろうし、そのような自由の中で柔軟な思考が生まれ、今後新しい技術が導入されてもそれを積極的に使用していける社会になると思う。だが同時に感じたのは、ICT に詳しい教員が積極的に引っ張っていかないと導入が難しいという現状である。導入始めの現在では仕方ないことだとは思いますが一部の先生が負担を抱えるような制度が続くと仕事の量に大幅な差が生まれてしまうと思う。また、自信のある先生がいない場合は導入のハードルが高い。国や公的機関などが責任を持ってサポートしてくれるような仕組みがあると、ハードルは下がり、さらに ICT 化は進んでいくだろう。

3-03 利点や改善点を再認識

今回の講義では、ネットの力を利用した教育について、その利点や改善点を再確認することができた。現代の日本では、ネットを利用した授業、そしてテスト等が増えていることは誰もが感じていることだと思う。このご時世ということもあり、私自身も大学生になったの初めてのテストをオンライン上で受けた。また、それに伴ってパソコンやタブレット端末の使用方法を習得する必要があることも理解した。わたしが小・中学生の頃はパソコンの授業以外でパソコンやタブレットを使用したことがなかった。しかし、今では小学生から通常授業でタブレットなどの電子機器を使っている光景をよく見かける。このことから、電子機器に慣れる年齢も年々早まっていると感じる。積極的な授業内での ICT の活用で、教師が効率よく授業を進められるだけでなく生徒一人一人が積極的に、そして楽しんで授業に参加することができると思った。それだけでなく、情報の管理や共有も容易になり、更なる教育の

効率化が進んでいくことを期待したいと思う。授業内でも話に上がっていたが、私自身もあまり ICT 機器の扱いが慣れてなくあまり得意ではない。しかしそれに関してはこれから技術や能力を高められるし、分かる人や得意な人に頼ることは悪いことではないということを理解できて安心した。メリットとデメリットの両方をきちんと踏まえて、今後の教育の在り方についても考えていこうと思う。

3-04 メリットとデメリット

最近の中高の学習方法の進化に驚いた。二人の先生の話では、今まで私達の時代では紙でやっていたことが全て、各生徒一人一人が所持している、学校から配布されたタブレットで行われているということであったが羨ましいと感じた。特に、資料がグーグルクラスルームなどのタブレット上で配布されることで、何回でも復習できるし、「失くした」というリスクを負う必要がなくなるので非常に良いと感じる。いつでも何回でも授業内容がタブレット上で復習できるという学習環境は、一人一人の学習格差を以前よりも断然小さくすることができるのではないかと考える。更には、授業中に問題を解いている生徒の様子を先生方が持っている端末からチェックできるとのことであったが、その点も授業に追いついてきていない生徒を確認できるし、個別に対応できるので、今までよりももっと効率的で質が向上した教育ができるのではないかと思った。これからの新しいタイプの教育を受けられる生徒さん達がとても羨ましい。生徒だけでなく、先生方の負担も減らすことができメリットが多いと思う反面、画面の見過ぎによる視力低下などへの対策も考えなくてはならないのではないかと感じた。

これらの学校教育におけるタブレット端末配布・教育は、コロナの流行に伴う対面授業の停止・オンライン授業対応があったから急速に転換していったのではないかと推測すると、コロナが与えた教育面の影響も大きいのだなと感じた。

3-05 メリットと学習効果を長い目で見る必要性

学校ではコロナの影響でかなりの速度で教育が変化しており、国としてハード、ソフト、指導体制を三本柱とした GIGA スクール構想というものがあり、これを実現することによって誰一人取り残すことのない個別最適の学びの実現が可能になる。今までは ICT 器具を教具としていたがこれからは文房具のように使用していくことが大切である。そのポイントとして毎日の学校のデジタル化、子供の基礎 ICT スキルの育成、自立活用が重要になってくる。実際にテストや授業を Google フォームで行っているという話も聞いた。また、

Google フォームを利用したテストでは、パソコンの使用が不安という生徒に向けて、ペーパーのテストでの受講も可能にするというようなハイブリットな形態を採用していた。また、このようなインターネットを利用した授業のメリットとして、内気で質問できないような生徒も匿名で質問することができるようなシステムや、黒板にいちいち移動しなくても生徒がそれぞれ席で入力したものがインターネット上で簡単に共有できるといったメリットがある。また、ICTによる学習効果の実感がわかるのは数年後になるという話があるので、すぐに効果がないからやめるなどではなく、長い目で見て導入していく必要がある。

3-06 教師の力量向上 公立私立の違い

今回は ICT 教育について学んだ。実際に中高の先生のお話を聞けることは貴重なので興味深かった。ただ、ICT 教育の弊害として授業中に生徒がネットに夢中になって進まなかったり、ネット環境が悪いと言い訳されて宿題をやってこないなどが挙げられると思った。ICT 教育が進めば進むほどより教師としての必要とされる技術が多くなるだろう。船橋市の中学校では定期試験がネット上で行われると聞いてとても驚いた。私が中学生の時は当然すべて紙媒体だったので、テスト中に iPad を使うことや振り返りもネットで行うことができるのは便利で時間短縮にもなるとわかった。また、ICT 機器を消しゴムやペンなどのようにほかの文房具と同じように使っていくという話を聞いて、今や ICT を使うことは全く特別ではなく当たり前になってきたと感じた。情報化社会になり教育もそれに伴って動いていくが、生徒はもう生まれた時からその環境があるので置いて行かれることはないとはいえ、教師側が、ログインがわからないなどのことが起こるのは少し問題だと思う。また、公立と私立の違いについても、私立は使いやすさなどを考えてすぐに取り入れられるが、公立はいろいろ条件があると学んだ。しかし、今までも公立私立の格差はあったが、ネットは使う機器が違うだけで差はないと思うので、ICT 機器上の格差問題はそこまでひどくないと考えた。